

山本八重から新島八重へ

私らしく生きる (後編)

二七回生 林 裕三

一・前編のあらすじ

山本八重は1845年(弘化2)12月1日、会津藩で代々砲術師範を務める山本権八と佐久の長女として鶴ヶ城の近くに生まれる。「ならぬことはならぬ」で知られる「仕の掟」等による会津藩の厳しい藩風の中で逞しく育ちながら一七歳年上の兄山本覚馬から、また覚馬が三年間の江戸の修業中知り合った、その後、覚馬の要請により山本家の居候となる出石藩の川崎正之助からも砲術の修練を受ける。砲術などのことばかり興味を持つ八重に困った両親は薙刀や機織、裁縫なども仕込ませている。

幕府の政治は1853年(嘉永6)のペリー来航以来、混乱を極め、薩摩藩の力を背景に朝廷は將軍の上洛を促した。その上洛する京では攘夷を唱える浪士た

ちが跋扈し、無法地帯となりかけていた。最早京都所司代だけでは京都の治安を守られないと考えた幕府は「京都守護職」の新設を考え、会津藩主松平容保にその職就任を要請した。1862年(文久2)藩主は家老たちの反対を「藩祖正之公の家訓」を楯に、藩士を説得し京都守護職の命を受け、覚馬も上洛する。

京都守護職に就任した会津藩はますます幕末の政争に巻き込まれ、西洋砲術に長けた川崎正之助にも上洛の要請があり、正式に会津藩士となり名も尚之助と改名し、八重と結婚する。しかし時代の動きは早く尚之助が上洛する迄に鳥羽伏見の戦いが勃発し、ついには朝敵となってしまふ。この戦争で戦傷死した弟三郎の装束を身にまとった八重は会津戦争に参戦した。新式七連発スパンサー銃で新政府軍を相手に奮戦する姿は「幕末のジャンヌダルク」と呼ばれた。向学心にあふれる八重は、長崎帰りの幕医に西洋医学の包帯の巻き方を教わり、籠城戦では負傷兵士の看護を行い、後の篤志看護活動に活かしている。

会津藩はついに降伏を決意し、開城したその翌朝、新政府から配られた真白い握飯を疑いながらも、美味しく食べたとのことである。

二・降伏後 藩は斗南へ・尚之助の死

女子供は咎めなしと言うことで、男性のみ猪苗代湖に連行された。八重は尚之助が何処にいるか分からなかったもので、同じように連行されたかったが、「あつ女郎がいる」と排除された。尚之助とは会えないままに別かれた。その後、八重たち一家は幕末面倒を見ていた米沢藩の内藤新一郎家の世話になる。会津藩にも米沢行き手当てを申請している。この申請書には「川崎尚之助妻合一、山本権八妻、嫁・孫娘・伯母合一」となっている。伯母が誰か博物館学芸員に問い合わせても不明であった。

一方の川崎尚之助は他の藩士と共に猪苗代から東京へ連行された。しばらくして会津松平家再興の条件として与えられたのは不毛の地下北半島地区であった。三万石と言われているが実際は七千石しかなく、領民が食べていくことが出来ないで、尚之助は義侠心をおこし、上司である柴太一郎(会津出身の初の陸軍大將柴五郎の長兄)の後見で広東米四千五百両相当の先物買付けを行うため柴と尚之助は函館に行っている。裁判沙汰になり、柴も尚之助も拘留される。三年後に解決するが米が暴落していて、三千両の借金を負う。

藩に迷惑をかけられないと言うことで、自分一人の責任と言うことで供述する。廃藩置県で財政的に旧斗南藩としては関わりなくなかったのか、元斗南藩の権知事山川浩(元会津藩家老山川大蔵)も藩は事件に一切関係がないとした。また、この係争中の届け書類には尚之助は独り身の記述になっており、八重を巻き込むことを避けたと思う。また心労が多かったのか肺炎となつて寝込むことが多かったと推定する。

尚之助の面倒を見てきた身元引受人は会津藩士および籠城が始まるまで尚之助のもとで砲術を学んでいた米沢藩士らである。柴太一郎側の資料にも部下であり、本件の首謀者であった川崎尚之助の名前が一切出てこないのは不思議である。京都にいる覚馬に尚之助の死亡(1875年(明治8年3月))を通知してきた手紙には次の狂歌も記されていた。

「このころは金のなる子の綱切れて、ぶらりと暮らすとりこえ(今の浅草)の里」

「今日はまだ糧の配りはなかりけり、貧すりやどんの音はすれども」

三・八重ら京都へ

米沢にいた八重の元に、亡くなったと思っていた兄

覚馬から京都に来るようにとの手紙が届き、明治4年10月皆京都へ行く。ただし覚馬の妻うらはは実家のこともあり、同行せず。覚馬が提出した「管見」は新政府に認められ、京都府勸業嘱託となつて、権知事榎村正直、明石博高らと遷都され寂れていく京都の近代化に努めていた。正に「管見」で提案したことを実際に京都で具現化すべく取り組んでいたのだ。覚馬の給料は覚馬伝では四五円となつてはいるが、少なくとも三〇円以上で、相当優遇されていた。住居も仕事場勸業場の近く河原町御池の南西角、新門辰五郎の住居跡が宛がわれた。

全く目が見えなくなつていた兄覚馬の世話をしていた時榮の存在を無視するわけにはいかず、母佐久も八重も覚馬の時榮との結婚を認めた。八重も兄覚馬に説得されてか山本家に復籍する。

八重には兄覚馬に協力する仕事次々あてがわれた。京都女紅場の権舎長の他、習字・機械の教鞭をとるほか、博覧会のための英文案内記の植字もした。

京都には日本最初と言うのが多くある。例えば柳池小学校、最初の図書館、少し後になるが最初の路面電車、最初の水力発電所など、榎村・覚馬のコンビで

会に恵まれ備中玉島まで往復航海する。1864年(元治元年)軍艦教授所の教授をしていた新錢座の中浜万次郎に質問しようと出て行った途中で備中松山藩の玉島へ行った仲間と会い「快風丸」が箱館へ行くことを知る。急いで自藩や備中松山藩に願ひ出て15両の手当も貰つて許可を得た。この間三日間、見事と言う他ない。箱館に着くと、目的であつた武田斐三郎の塾を訪ねるも塾主江戸に出て不在、やむなく留守居の菅沼精一郎と会食しているとロシア領事館付司祭ニコライが日本語の教師を求めていることを知り、ニコライの寓居に移る。そこでニコライが古事記を勉強するのを助け、領事館付武官に英語を習う。元土佐藩士で神明社の宮司である澤辺琢磨(会津戦争終了後、会津藩家老西郷頼母および山川捨松の面倒を函館にて見ている)が訪ねて来、英国商社ポーター商会の店員富士屋卯之吉を紹介され、英語を時々教えてもらう。卯之吉の人物を信じて海外渡航を打ち明ける。卯之吉大いに賛成し幫助を約束する。6月14日卯之吉より「今夜脱国の準備をなし夜に来たれ」と連絡あり、澤辺が神明社にて送別会を開催してくれ、卯之吉が待つ築島のポーター商会に行く。卯之吉が操る小舟に乗つて沖にあるベル

次々と事業を拡大したが、京都から東京へ転籍していく企業が多く出てきた状況の中で、榎村が小野組の東京転籍を認めず、榎村が東京にて拘禁された。法的には小野組の言い分が正しいのだが、榎村がいなくなれば仕事が進まない。覚馬はやむなく榎村釈放の為、八重に付添われ上京。岩倉具視、木戸孝允、江藤新平の間を奔走した。八重の話では82歳の覚馬を人力車等の乗降り時に負う為、付添として上京し、江藤新平宅で書生達に覚馬を負う姿をジロジロ見られるのがイヤだつたとのことである。この年の12月まで滞在した。結果三〇円で釈放された。

四・帰ってきた新島襄

覚馬、八重兄妹が京都の近代化に取り組んでいるときに、八重の新しい夫となる新島襄(幼名七五三太)が米国での十年間の留学から帰つてきた。

新島七五三太は父藩の祐筆民治と母とみの嫡男として安中藩江戸屋敷(現神田学士会館)にて1843年(天保14)に生まれる。十三歳から蘭学を学び1860年(万延1)江戸湾に現れたオランダ軍艦に驚き、前後して築地の軍艦教授所に通う。安中藩の宗家に当たる備中松山藩の洋式帆船「快風丸」に乗る機

リン号に乗込み、船倉に潜む。翌日昼甲板に上り、祖国に感慨無量の訣別をする。上海でワイルド・ローバー号に乗り換え、翌年1865年(慶応1)7月20日ボストンに入港する。

約一ヶ月船番させられた後、船主アルフェス・ハーディーから脱国の理由の提出を求められ、提出する。ハーディー夫妻、この一書に深く感じ入つて保護を決定する。新しい服装を買い与えられ、フィリップアカデミーで英語を学び、その間に洗礼を受ける。アーモスト大学に入学し、1870年(明治3)理学士の称号を受けて卒業する。アンドーバー神学校に入学し神学の勉強をする。襄は明治4年2月に弟双六に対し、帰国後のことを藩の飯田逸之助に免罪の訴願の依頼するよう頼んでいる。それが効果があつたのか、駐米公使森有礼も襄に対し申請するなら旅券の発行をするとの申し出が4月にあつた。いずれにしろ明治4年8月22日森有礼の斡旋で日本政府から旅券と留学免許状が交付される。晴れて襄が一番悩んでいた「脱国者」ではなくつたのだ。でもこのとき、今までハーディーが費やした費用も日本政府が出すと言う申し出に対して、襄は「断つて欲しい」とハーディーにお願いして

いる。日本政府から自由になりたいたいからだ。

公使という仕事柄当たり前か知らないが、この森有礼は非常に細やかで、山川捨松などの留学費用もホームステイの家と細やかに打合せをしている。話は少し反れるが捨松の伝記を読んでいると森有礼がなんとキリスト教解禁の法令の文案をこのホームステイの牧師に相談していることが分かった。もう一つ付け加えるならば、兄健次郎は留学の経験もあるのでホームステイ先と交渉していたが、その中で「家族として受け入れてくれることはありがたいがくれぐれも妹をクリスマスチャンにしないで欲しい。何故ならキリスト教は日本では禁制で官費にて妹は留学させもらっているからだ」と依頼している。結果的には捨松は受洗したし、妹がクリスマスチャンになることを恐れていた兄健次郎は皮肉にも、日本政府に信仰の自由を認めさせる法案の原案を書いた当人の家に預けたことになったのだ。

新島襄の話に戻すと、1872年(明治5)3月に岩倉遣外使節団の通訳を務める。田中不二麿文部理事官にも面会し、彼の通訳兼案内人を務め、欧米の教育制度の視察にも随行する。それだけでなく、一連の視察報告として田中が文部省に出す「理事功程」を新島自

とや、英語が少し出来ることに驚き、八重に興味を持つたに違いない。兄覚馬の勧めもあり、会ってから八ヶ月程経った1876年(明治9)1月2日八重がデエヴィスから受洗し、翌日3日デエヴィス司祭の下洋式で結婚。八重自らの手作りのクッキーで祝った。

覚馬や八重がすんなりキリスト教を受け入れたのか、不思議である。「明治の精神的革命は維新の敗者により担われた」と聞くし、ニコライは「儒教的教育を受けた日本人が欧米の思想に会うと自ら従順に生徒の位置に降り、新しい真心を持って熱心に帰依するものになっていく」と書いている。新島襄は「封建君主に忠義を尽くすように厳しく鍛えられて来ただけに、武士階級は大領主たる神に対し一層忠節を尽くすだろう」と支援してくれているアメリカンボードに報告している。会津の人達のその後を顧ると考えさせられる。

仲人までしてやると言った榎村知事は仏教徒の反対が強くなって、覚馬も八重をも京都府の要職から罷免した。しかも同志社の充実にも妨害した。何回も政府要人へ赴任要請をされ断っていた田中不二麿に対し逆に上京してまで援助の要請し、木戸孝允にも協力を願い、外国人雇用などを認めさせた。

身が素案脱稿する。約一年間、使節団に協力しアンドバー神学校に復学する。この間に木戸孝允等の政府要人との交流を深め、後の学校設立時に助けられる。1874年(明治7年)神学校を卒業し、ラットランドの今のグレース教会にて「日本にキリスト教主義の学校を設立すること」を訴え献金総額五千ドルの約束を得て日本に帰る。

五.キリスト教主義の学校設立へ

十年ぶりに帰国した新島襄は両親と再会し、二ヶ月経たないうち大阪での学校の設立を木戸孝允に嘆願する。木戸が紹介してくれた大阪府知事との交渉進まず気晴らしに京都へ、三条に滞在中のゴードンを訪ね博覧会 勸業場 女紅場を見学。この後 山本覚馬 京都府権知事 榎村正直と数回会い 学校用地として山本が所有する旧薩摩藩邸を譲り受けることになる。新島襄、山本覚馬および宣教師デエヴィスの協力で1875年(明治8)11月29日同志社英学校が設立した。

八重が新島と会った時のことを少し詳しく述べる。聖書を習いにゴードン宅を訪れた八重は先程玄関先で靴磨きをしていた新島襄を紹介されボーイと間違えていた事に戸惑う。新島は八重が聖書を勉強しているこ

翌年9月閉校になった熊本洋学校の生徒約四十名を同志社が受入れることになった。後の徳富蘇峰、金森通倫、横井時雄、小崎弘道、海老名弾正、宮川経輝らである。宣教師たちは彼らを熊本から来た生徒と言う意味で熊本バンドと呼んだ。八重は田舎から出てきた彼らに下着や毛布など準備してやったが、彼らは八重の洋装だけでなく、校長新島に対する振る舞いを嫌った。レディーファーストの米国で十年間学んだ礼法が身についている襄は人力車には八重から乗せ、ファーストネームで呼ばせた。一番嫌った後の蘇峰、徳富猪一郎は新島夫妻も出席した同志社の演説会で、八重の外見や態度を「鶴」のようだと言った。蘇峰は自伝の中で「敬愛している先生に対して、我々の眼前において、余りにも馴れ馴れしき事をして癪にさわったからだ」と書いている。しかしこのようなことは一ヶ月もの籠城で戦った八重にとっては小さなことであった。時々学校へ来て 学生達に「ぜんざいを食べにいらつしやい」と自宅へ誘っていたとのことである。

同志社の中での問題の他に、仏教徒 政府 京都榎村 府政と闘いながら大学設立趣旨を発表し募金活動し、新島自身は勿論のこと、熊本バンドの卒業生も 全国布

教活動に務め、宣教師達と調整説得しながらアメリカンポート、あるいはハーディーに資金を要請し同志社は充実していく。

京都府の顧問を罷免された覚馬は府会議員になり初代府会議長に選出され活動したほか、卒業生と共にキリスト教の演説会を開催し自らも演説もした。覚馬にも相談した上のことだろうが、元会津藩家老山川浩から元藩主容保の長男容大の同志社への入学希望要請が新島襄にあった。その手紙に「宗教的教育をして欲しい」旨記載があった。弟健次郎とは違う考え方をしていることに興味を持った。或いは容大の素養が宗教に頼らざるを得ないと考えたのだろうか。結果的には入学し直ぐ問題を起こし退学となった。覚馬、八重の気持ちはどうだったのだろうか。養育係として一緒に入学した兼子重光は立派に卒業し、牧師になって会津地方の伝道に務めた。

覚馬は自宅でもまた講義をしていたのか、この新しい考え方に感銘を受けたと言う会津藩の口入業の元締め大垣屋清八が『三』のドラマに出てくるが、彼を調べると、不勉強であった。大沢商会を創立した大沢善助の養父であることが分かった。大沢善助は新島襄から

が訪ねたとき『狭き門より入れよ』と言われてもこのくぐりは通れないな』と太った体を押し入ったと落実は残している。襄よりも八重の方が余程ユーモアを理解している。

八重は女紅場を解雇されたこともあり、英学校が出来た翌年二ヶ月後、自宅で女学校の前身となる女子塾をドーモン夫人と立ち上げたが、襄は共学を目指したかったのか、女学校には余り関与していない。賛同したのはデイヴィスで、本格的なものをと言うことで女宣教師スタークウェザーが着任し、デイヴィスの自宅で女子寄宿学校を開校する。八重は英語のスペリングと小笠原流の作法を教えていたようだ。1877年4月28日正式に同志社分校女紅場が認可され、9月に同志社女学校と改称する。八重の母佐久も前年洗礼を受け、舎監となって助ける。米国で経験もあり、専門的教育を受けたスタークウェザーの教え方と、会津の母娘の儒教的な教え方、相手は日本人の若い娘、どうしても日本人組の勝ちになる。卒業生の話を聞いても、「宣教師の先生が厳しすぎた」とか「佐久おばあさんの話が面白かった」などが多い。スタークウェザーは悩んで米国に一時帰国する。佐久も舎監を辞め、新島

受洗をしている。受洗後、養父がやっていた俠客的な部分は上坂仙吉こと会津の小鉄に任せたとのことである。覚馬らが企画した電気鉄道会社、電灯会社およびそのための発電所、疎水などを次々と事業化した。同志社にも相当支援した。八重がお茶に興味を持ったとき子供たちに教える代わりに支援していたようだ。

襄は約十年間留学してホームステイしていた生活様式を理想としていたので、襄と八重は西洋的なクリスマスチャンホームを営んで殆ど洋食を好んで食べた。襄は甘いもの好きなのでワッフルやジンジャーブレッドを宣教師婦人から聞いて作っていたようだ。お客用に焼いて隠していたお菓子も熊本から来た生徒、後に牧師となつて驚異的に岡山地区で伝道した金森通倫と襄と一緒に食べてしまったので、八重はやむなく再び焼いたとの話もある。

学校の運営で難しいことがあると、襄は直ぐ顔に出たらしく、八重は「今日は天気が良いのに雷が落ちそうだ」と言って襄をたしなめた。襄も「生徒の前ではこんな顔をしない」と言って直ぐ反省したようだ。もう一つ面白いエピソードを紹介したい。蘇峰の妹の、音羽の娘、後の女性解放運動家久布白落実の家に八重

も女学校に今まで以上に関与したことにより、問題は落ち着いていった。

六、襄の闘病生活と死亡

襄の健康を気遣つてのこともあり、襄と八重は二人で旅行をする。1882年(明治15)7月から襄は蘇峰、と横井小楠の長男時雄らと一緒に京都から中山道を通つて安中まで行く。横道に反れるが、蘇峰自伝には「親戚の時雄を特別扱い受けるのは、いいとしても、それよりも困ったことは、寄れば触れば新島先生が余に向かつて基督教に復帰せしむべき説教されることであつた。」旨記載している。安中で八重や覚馬の娘峰が待ちうけ、一緒に会津若松に行つていく。八重は籠城戦の話を一息懸命しただろう。その戦いに生抜いた八重のことを襄は尊敬したのではないかと思う。函館にも行つていく。今度は逆に脱国時の様子を色々八重に説明したのだろう。札幌に行つて、脱国の幫助をした富士屋卯之吉こと福土成豊および札幌農学校一期生(クラークの薫陶を受けている)牧師である大島正健に会つていく。札幌滞在中の借家を福土は提供してくれた。このとき八重は子供のとき一緒に遊んだ日向ユキ(結婚後内藤ユキ)に会つていく。しかもこの出会

いが縁となつてユキの長男内藤一雄が同志社に入学している。

裏が相当健康を害していることを宣教師の医者らから聞いた八重は長い手紙を書かないように裏を監視していたとのことである。裏は八重のことを「巡查」「警察官」とよんでいたが、八重の目を盗んで書いていたらしい。1889年(明治22)11月28日大宇設立募金の疲れから前橋で倒れる。年末、募金活動を中断し大磯の「百足屋」にて静養する。しかし、裏は側に言つて看病したいと言ふ八重の願いを再三に渡り病気がちな裏の母とみを氣遣つて押し留めていた。翌年の1月17日危篤状態になつたので八重は大磯に20日駆け付けた。裏は「今日ほどあなたを待つた日はなかつた」と告げる。蘇峰 小崎弘道を呼んで遺言を蘇峰に書かせ、1890年(明治23)1月23日八重に抱きかかえられながら「狼狽するなかれ、グッドバイ、また会わん」と最後の言葉を残して永眠した。蘇峰は八重に対し「今までの非礼を詫びる。先生が逝かれたからには、今後貴方を先生の形見とし取り扱います」旨言つたと自伝にある。

翌日 遺体は京都七条駅にて約六百名の学生らに迎

日露戦争中 篤志看護婦を率いて大阪の予備病院にて篤志看護婦として従軍し、翌年 勲六等宝冠章授与された。日赤篤志看護婦人会の理事でもあり 一緒に籠城した大山捨松の影響があつたかもしれない。



1905年、若い篤志看護婦たちと。

新島夫婦は子供がいなかつたため子供を非常に可愛がった。特に夫婦が健在のとき 札幌を訪ねたとき

えられ、学生たちに担がれ自宅まで運ばれる。1月27日同志社チャペル前大テントで葬儀、四千名の参列者であつた。式後、同志社の学生が遺体を担いで、若王子山頂まで運び土葬する。翌年当初の木製の墓標に変えて、勝海舟揮毫による墓石が建てられた。

七、裏没後の八重

新島が亡くなつた後、八重は同志社と距離を置きながらも卒業式や新島記念会には出席し、乞われるままに、亡夫の思い出を語つていたようである。しかも一度ならず、岸和田には伝道に行つてゐる。裏から学資の一部援助をしてもらつていた後ほど13代目日銀総裁になつた深井英五が、学資のことを尋ねると「そのことは裏から聞いている。今後私が渡します」と答えたとの話である。

裏が亡くなつたその年に、日本赤十字社の正会員となり社会奉仕に情熱を注ぐ。1894年(明治27)の日清戦争中 篤志看護婦を率いて救護に 広島の陸軍病院で従軍する。この働きで1896年(明治29)勲七等宝冠章授与される。その後八重は篤志看護婦人会の看護学修業証を得て、看護学校の助教を勤め、京都支会幹事を委嘱される。1904年(明治37)の

札幌農学校の助教をしていた大島正健に会つたと記載したが、夫婦は正健の長男正満を非常にかわいがつた。正満も夫婦に甘え、時には裏が正満を負つたりしている。正健が教会の要請により牧師になつたことが問題となり、新島が按手札をしたことで問題は収まつたかに見えたが独立系教会の牧師が組合系の新島から按手札を受けたことも問題となり、また農学校の助教をしながら牧師をしていることも問題となり、やむなく農学校を辞任し 同志社普通学校の教授となつて京都へ来た。八重はかわいがつていた正満が小学生となつて会えたことをどんなに喜んだらうか。正満はその後農学博士になる前後 裏が米国留学中アーモスト大学の寮におけるルームメイト「ホーランドとの交流もあり 調べていくと面白い。田沢湖でクニマスが絶滅すると予想したのもこの大島正満である。

八重がお茶を学び始めたのは裏が亡くなつた四年後の明治27年のことである。もともと山本家は先祖の山本道珍良次が遠州流の茶師であつたことや、女紅場で教えていた頃、圓能斎の母上も関与していたこともあつて、五十歳から始めたにもかかわらず、圓能斎から次々と許状を受ける。ここにも籠城に耐えた八重ら

しさが出てくる。戦国時代、江戸時代、茶道は男のものであった。現在のように茶道が女性中心になり始めたのはこの時期だったと言われている。圓能齋の活躍もあるだろうし、八重らの昇進も無視出来なかったようだ。自宅にも茶室を造り、圓能齋が揮毫した扁額には「寂中庵」と書かれている。ここで教えるだけでなく女学校の生徒にも教えていた。「新島宗竹」と言う茶名まで貰って、そして1923年(大正11)ついに最高位と言われる「奥秘大圓傳法」を授かっている。田中滋野のお弟子さんが八重の弟子になったことで、引っ越したなどの話もあったとか。この滋野が八重と朝風呂先着争いをしたおばあさんである。後から来た方はこの朝風呂に入らず帰っていたようだ。八重はいつまでも勝気であった。

八重が八十路になった歳に大正天皇の皇后(貞明皇后)が同志社女学校に行啓され、拜謁。「反キリスト教勢力と闘って来た在天の裏こそ喜んでゐるはず」と感想を述べた。女学校のある教授は「今回の行啓は、我等信徒が世人より嫌悪され、迫害され、不法の差別待遇を打破したことに、単に我校の光栄のみでなく、実に我国基督教会の維新と言うべき」旨述べている。

「六十とせの昔を語る友もなく あはれ寂しき
こほろぎの声」
八重はいつまでも会津人である。

やるべきことが残っていると思つたのか、会津に向き、菩提寺の大龍寺(会津若松市)に山本家の墓を建立。墓の裏には「昭和六年九月合葬 山本権八女 京都住新島八重建之八十七才」と刻まれている。

翌年二月 京都ホテルで米寿祝賀晩餐会が開催され、この四ヵ月後6月14日 会津籠城戦で女丈夫の八重は新島邸の二階で静かに急性胆嚢炎により永眠した。山本八重として新政府軍だけでなく会津の男中心の考え方と戦つた八重は、京都に来て新島襄と一緒に新島八重として、当時はまだ四面楚歌とも言ふべき境遇にあつた基督教に身を投じ女丈夫として生き抜いたのだ。

6月17日 同志社に完成したばかりの栄光館で葬儀され、四千名の人々が参列した。墓は若王子の新島襄の墓の隣に建てられた。墓名は徳富蘇峰が揮毫した。

完

大正天皇の誕生地は同志社女学校の発祥地つまり公家柳原前光邸であること、つまり大正天皇の母君は前光の妹 柳原愛子で皇太子妃(後の貞明皇后)を、非常にかわいがつた。このようなわけで義母である柳原愛子の実家柳原邸に出来た同志社女学校に相当な思い入れがあつたのではないかと推定する。

慶事は続いた。翌年の昭和天皇大礼時にも八重に記念章の天杯が授与された。いずれも 篤志看護婦人会の活動に対する評価だ。昭和天皇が貞明皇后の長男であることから、これも貞明皇后の繋がりと見える。

更に貞明皇后の繋がりで慶事がこの四年後つまり会津戦争から六十年経た1928年(昭和3)1月18日元会津藩主容保の孫 松平節子(成婚に当たり勢津子と改名)と大正天皇の第二皇子秩父宮との婚約発表である。会津藩との蟠りを解きたいとされた貞明皇后のお考えからといわれている。これで会津藩は朝敵・逆賊の汚名返上をすることが出来たのである。

八重は嬉しさの余り、次のように歌つた。
「幾年か峰にかかれる群雲の 晴れて嬉しき
光をぞ 見る」
しかし嬉しさの中にこのような歌もある。

山川兄弟



参考 会津藩家老 山川家の人々の系図を示す。